序文

2011年，「眼科診療：5年前の常識は，現在の非常識」という増刊号を刊行した。そこでは，発刊以前の5年間に，臨床眼科分野において変化した内容のみを選択的に記述した。読者が習得すべき重要な内容を明らかにするだけでなく，その量を最小限にするためである。想定した読者は中堅眼科医であり，多忙な彼らが，日常業務の合間に短時間で知識のアップデートを可能にすることを狙ったものであった。おかげで，多くの中堅医師のみならず，研修医からも好評を博することができたが，このことはこういう種類の情報が求められていることを，我々に深く認識させてくれた。

さて，先の刊行から7年が過ぎ，新たなものが必要であるという声が寄せられるようになってきた。その理由は3つに分けられる。

1つ目は情報のアップデートの必要性である。過去7年間は，今まで以上に眼科診療の内容が変化した。例えば，網膜分野では，光干渉断層計(OCT)検査が広まり，新しい疾患概念が出現した。いまだ研究段階と思われたOCT血管造影検査が，本年保険収載され，眼科医にとって必須の知識となった。筆者の専門の網膜分野だけでも，これだけの変化があるが，同様の変化が眼科領域の各分野で起こっている。しかも，社会は眼科医がこれら最新の知識をすべて有することを求めているのである。これを医師一人で，短時間に習得するのはほぼ不可能であるが，それを可能にする方法がいっそう必要とされているのである。

2つ目は，知識伝達法の変化への対応を求める声である。医学情報の伝達は書物によって行われてきたが，インターネットの登場により大きく変化した。その大きなものが，動画による情報伝達である。手術のコツなどは，文章で書くよりも，動画を見るほうがわかりやすく，動画による情報伝達が主流になりつつある。その点について，改善を求める声は強く，これからは書籍においても動画による解説が必須であるという強い要望がある。

そして，3つ目が情報の信頼性担保の必要性である。現在インターネットなどを通じて，自分の意見を手軽に発信できる反面，情報の正誤の判断が難しくなってきている。インターネット上の医学情報は，専門家によって検証されておらず，一部のものは明らかに誤っているが，そのことはあまり理解されていない。それらをむやみに信じて治療を行うと，不測の結果を招きかねないし，その直接的被害は患者やその家族に及ぶのである。そのためには，情報発信源と内容に関して，検証可能な形式の情報伝達が必須である。

本書は，それらの要求を満たすために新たに企画された。内容や伝達手段など先駆的なものを取り入れたが，情報の信頼性を担保するために，執筆者は斯界の第一人者にお願いしたことを特記したい。前回の出版と同様に，日常業務に追われているが，最新の眼科知識を持って診療を行いたいという多くの良心的な眼科医にとって，本書が益することができれば幸甚である。

坂本泰二(鹿児島大学)

©IGAKU-SHOIN Ltd, 2018

2026/09/17 12:13:17